

道博協ニュース

発行所 北海道博物館協会 事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

第57回全国博物館大会について

10月1日(木)、2日(金)の二日間、第57回全国博物館大会が旭川市で開催されたので、その概要を報告する。

本大会は、財団法人日本博物館協会主催、北海道、北海道教育委員会、旭川市、旭川市教育委員会及び北海道博物館協会の共催のもと、文部科学省の後援を得て開催されたものである。会場となった旭川市大雪クリスタルホールには、全国の博物館関係者309名が集った。

大会会場の旭川市大雪クリスタルホールは、平成5年に博物館、音楽堂、会議場の機能を持った複合施設としてオープンした。

博物館については、開館から15年を経過したことから、昨年常設展示室の一部リニューアルを行い、11月にオープンしている。常設展示室は、上

層階と下層階の2層構造となっているが、リニューアルは上層階を中心に行った。各時代の住居展示を廃し、上層階全体をアイヌのくまびとの歴史と文化、北方民族資料の展示に衣替えした。

このような時期に全国の博物館関係者にリニューアルされた展示を見て頂く機会を得たこと、また、全国博物館大会の実行委員の一員に加わったことは、時宜を得たものであった。

さて、大会のメインテーマ「博物館の再生、地域と文化の創造」は、開催地の旭川市が、再生を進める旭山動物園により、地域の活性化が図られ、多くの来園者で賑わっていることから取りあげられた。「博物館が再生することがどのような意味を持つのか」、「博物館が抱える今日的な課題」について議論を深めることがねらいであった。

一日目は、音楽堂を主会場に佐々木正峰氏(前国立科学博物館長)の基調講演「博物館を作る」に続いてシンポジウムI「地域と文化の創造ーア



全体会議の様子

イヌ文化と博物館」、二日目には、シンポジウムⅡ「博物館の再生－魅力ある博物館づくり」、シンポジウムⅢ「博物館を核とした住民の学び－博物館のボランティア活動」と3つのシンポジウムが行われた。

シンポジウムⅠ「地域と文化の創造－アイヌ文化と博物館」は、スチュアート・ヘンリ氏（放送大学教授）の司会のもと、瀬川拓郎（旭川市博物館副館長）、萱野志朗（萱野茂二風谷資料館館長）、出利葉浩司（北海道開拓記念館主任学芸員）の3氏により、それぞれの施設での取り組みと考え方が報告され、議論された。

会場からの質問も多く、活発な議論が展開された。アイヌの人びとは現代に脈々と文化を伝承していること、そのことを正しく伝えることが博物館の重要な使命であることが指摘された。

二日目は、午前中にシンポジウムⅡ「博物館の再生－魅力ある博物館づくり」、シンポジウムⅢ「博物館を核とした住民の学び－博物館のボランティア活動」が音楽堂及び大会議室で行われた。

「博物館の再生－魅力ある博物館づくり」は、大島直行氏（伊達市噴火湾文化研究所所長）の司会により、坂東元（旭川市旭山動物園園長）、西谷榮治（利尻町立博物館学芸課長）の2氏からそれぞれの施設の取り組みが報告された。

坂東氏からは、「動物が本来持っているすばらしい能力を発揮でき、来園者がその様子を気持ちよく見ることができること」をテーマとして整備を進めてきたこと、動物の命はどの種も同じ価値を持っているものであり、動物の希少さや珍しさに頼らず、「ありのまま」の素晴らしさを伝えることが旭山動物園の人気の原点と報告された。

西谷氏からは、鳥取県の保存会の協力による麒麟獅子舞の復活、青森県野辺地町沖揚音頭保存会と利尻町利尻沖揚音頭保存会の交流会が、いずれも博物館の調査が契機となったことが報告された。博物館の活動が、地域文化の再生・創造に関わる



質疑応答風景

ことができると同時に、地域の博物館としても魅力が高まり、博物館の再生に繋がる活動であることが提起された。

シンポジウムⅢ「博物館を核とした住民の学び－博物館のボランティア活動」は、中島宏一氏（北海道開拓の村事業課長）の司会で、五十嵐卓（損保ジャパン東郷青児美術館学芸課長）、石川直章（小樽市総合博物館主幹）、水田一彦（士別市立博物館館長）の3氏によりそれぞれの施設のボランティアの制度と取り組みについて報告された。

このシンポジウムでは、ボランティア活動をおして地域住民とのコミュニケーションを育み、地域住民の核となる博物館づくり、地域に存在意義を示す博物館づくりについて議論が深められた。

二日目午後には、第57回全国博物館大会決議（別記）が承認され、大会を閉会した。次期第58回大会は奈良県で開催される。

[決議文概要]

①地域と共に生きる博物館として総力を挙げて行動する。②博物館を今日の生涯学習、地域振興時代に相応しいものとするために、博物館登録制度、学芸員制度等を中心に博物館法の改正を引き続き要望する。③公立博物館における指定管理者制度の導入等に当たっては、管理運営が継続性を持って安定的に行われ、それぞれの館の目的・使命が効果的に達成されるよう留意して検討することが重要であること、また、地方独立行政法人制度が博物館にも適用されることを引き続き要望する。④新たな公益法人のもと特例民法法人から一般財団法人等に移行する法人が設置する博物館に係る固定資産税等について、経過措置終了後の平成26年度以降も非課税とされるよう要望する。⑤博物館のなご一層の発展と関係者の意欲向上の観点から科学研究費補助金において時限付分科細目として設定されている博物館学を恒久的な細目とされるよう要望する。

本大会の運営に当たり、丹保憲仁氏（北海道開拓記念館館長）、小林幸雄氏（北海道開拓記念館学芸部長）をはじめ北海道博物館協会事務局の皆様、杉浦重信氏（富良野市博物館館長）、水田一彦氏（士別市立博物館館長）、鈴木邦輝氏（名寄市北国博物館館長）に多大な御尽力をいただきました。心からお礼申し上げます。

（旭川市博物館科学館 館長 南 尚貴）

石狩・後志
空知地区
News

来年は 月形町開基130年を迎えます

月形町は、明治14年に北海道で最初の国立監獄「樺戸集治監」（現在で言う刑務所）が設置されたことによって拓かれたまちです。空知管内でも、最初に拓かれたまちでもあります。ご存知の方も多いかと思いますが、わがまちの名は、樺戸集治監初代典獄（刑務所長）月形潔氏の姓から名づけられています。

月形町だけでなく北海道の歴史を語るには、樺戸集治監は欠かせないものと思っています。その歴史を、「月形樺戸博物館」で展示解説しています。

囚人による道路開鑿や屯田兵屋の建設などと言った過酷な労働は、北海道の開拓の基礎となっています。博物館では、囚人の「罪」ではなく「開拓の功績」を全面に出して解説するようにしています。現在3名の解説員がおり、1名常駐しています。味のある解説をしていただいているので、来館者へのサービス効果は良く、うまく伝えていただいています。ただ、3人は高齢のため（私たちより元気なのですが）後継者を育てていくことが今後の課題です。

博物館の施設ともなっている「旧樺戸集治監本

庁舎」は、まちの歴史とともに時を過ごしてきた貴重な建物です。明治19年建築で木造平屋。月形町の指定文化財です。この建物の下見板の老朽化を防ぐために、今年度防腐剤を塗布しました。北海道の厳しい自然環境で建物を保存していくことは大変なことです。文化財を保存・活用しながらまちづくりの一躍を担っていければと考えています。

昨年からは、教育施設ではなく観光施設として位置づけをするということで、教育委員会から産業課商工観光係の所管となりました。これまでと大きく変わるわけではありませんが、他の観光施設とさらなる連携を深めて行くこととしています。

これからも効果的なマネージメントを模索しながら、博物館を運営したいと思っています。



旧樺戸集治監本庁舎

(月形町役場産業課商工観光係 主査 野本和宏)

道南ブロック
News

松前藩屋敷 「お化け屋敷」開設

松前藩屋敷は平成16年より施設の管理・運営を観光協会が町より委託を受け管理・運営を行っています。観光協会では年々減少傾向にある入館者の増大と施設の魅力アップを図る為、施設の空地スペースを活用して、平成20年より松前藩屋敷「お化け屋敷」を開設いたしました。松前町の観光資源である歴史と文化をいかして古くから伝わる数多くの民話・伝説をテーマとしています。開設にあたっては、過去に一度施設を活用してお化け屋敷を開設した団体「ときしらず」の協力をいただき、最小の経費で最大の効果を目指すため、建設資材は町内建設業者より格安に提供をいただき、職員・ときしらず、他にボランティアを募り、企画から設営までを手作りで行いました。この「お化け屋敷」は「恐怖の館」と名付け、規模は間口2.7m、奥行18mです。初年度は松前に伝わる怪談ばなしや伝説から、「手長池」「桂の木と大蛇」「玄狐」「血脈桜」「闇の夜の井戸」の五話をテーマとして、生首や暗闇・音を使い恐怖感を演出し「松前奇譚」と名付けて、7月26日から8月17日まで開設し、618人の入館者でした。平成21年、

開設2年目は春期と夏期の2シーズンを楽しめる松前藩屋敷の15棟目の施設として、「伝説の館」と改名し開設することとしました。春は伝説「血脈桜」をテーマに、光る影絵により桜の花や人物を表現し、血脈桜の伝説のあらすじを館内へ効果音により流し、幻想的な雰囲気演出して、4月27日から5月17日まで開設しました。開設中200人の入館者でした。夏は伝説「手長池」をテーマとして物語のあらすじを入口から出口までの間を光りと影、生首、池、効果音の設置により恐怖感を演出し、7月25日から8月17日まで開設し、942人の入館者がありました。この「伝説の館・お化け屋敷」と2年継続した効果が現れ藩屋敷の夏場の入館者が増加し、季節の風物詩として町内・外で評判になりました。町内の子供達は毎日のように藩屋敷に訪れお化け屋敷で楽しんでいました。



お化け屋敷の入口

(松前藩屋敷・松前観光協会 事務局長 佐藤 均)

道北3管内
News

開館10周年を迎えた オホーツクミュージアムえさし

道北の枝幸町の資料館施設「オホーツクミュージアムえさし」は、この10月をもって開館10年の節目を迎えることができました。宗谷地方の主要な観光ルートからはずれ、団体観光客がほとんど来館することのない資料館ですが、毎年一定数のお客様をお迎えすることができるのは、利用者の主体が地元住民にあるからだと考えています。

地域の調査研究や文化財保護活動には、枝幸町文化財保護委員会を中心に、高校生からお年寄りまで幅広い年齢層の町民が参加しています。枝幸の近代史を再発見することを目的とした砂金採取遺構の調査や拓殖軌道跡の調査、地域の自然環境を後世に伝えるための海岸砂丘や湿原での植生調査、海鳥繁殖調査、外来生物の分布調査など様々な調査研究テーマを設定し、



畑を耕すワークショップ参加者達

その都度、関心のある町民がボランティアとして活躍しています。職員も予算も限られた小さな資料館ではありますが、地域研究は一步ずつ進んでいます。

また、今年は開館10周年記念事業として、北海道開拓記念館の移動博物館「謎の岩面刻画ーフゴッベ洞窟」をお招きすることができました。期間中は講演会やシンポジウム、体験教室など様々な関連事業を共催し、町民を中心に約2,000人が来館しました。枝幸では「フゴッベ洞窟」という名前は知っていても、実際に見たことのある方はそう多くありません。オホーツク海沿岸の古代文化とは全く異なる「フゴッベ洞窟」を通じて北海道の歴史の奥深さ、豊かさを伝えられたと思います。

宗谷管内には枝幸町を含めて6人の学芸員がおり、歴史系の学芸員を中心に共同で特別展を企画するなど、連携した取り組みを進めています。単独では実現が難しい展示でも、資料収集や制作を分担することによって可能になることが分かりました。地方の博物館施設をとりまく環境は厳しさを増していますが、町民との協働、近隣自治体との連携によって新たな可能性を見つけたいと考えています。

(オホーツクミュージアムえさし 管理学芸係長 高島孝宗)

日胆地区
News

白老が目指すイオル再生事業

1997年、アイヌ文化振興法が施行され、その振興の柱となる事業の一つが「アイヌの伝統的生活空間（イオル）の再生事業」（以下イオル再生事業）である。白老町におけるイオル再生事業の取り組みを紹介したい。

イオル再生事業の先行地域として指定された、白老町は、太平洋に面し、海と山をつなぐ豊かな河川が先住するアイヌを育ててきた。現在でも、アイヌの人口が道内において最も多いとされる。

また、野外博物館である、財団法人アイヌ民族博物館があり、観光地としても国内外からの集客



ヤマブドウの蔓でテシマ（かんじき）製作体験

があり、貴重なアイヌ文化発信の拠点ともいえる。

初年度の中心は文化伝承活動に必要な有用植物の植栽であった。現在ではそれらの素材を利用した体験学習や文化伝承活動が展開され、アイヌ文化の普及啓発、人材の育成に力を注いでいる。

イオル再生事業の究極の目的は、アイヌ文化を育んだ自然環境の保全を図りながら、伝統文化の振興によりアイヌとしてのアイデンティティーを高め、多文化社会において、共に生きるシサムと尊厳を尊重しあえる社会環境の創造にある。

イオル再生事業が開始されてから、地域のアイヌが自らの文化を伝えるための企画検討を行い、それらを自らの言葉にして伝えるという機会が増えたことで、それらが誇りの回復に繋がっていることを実感している。

また、これまで義務教育においてアイヌ文化を学ぶ機会が少なかった児童及びその保護者向けの体験学習を行うことで、家庭内におけるアイヌ文化の理解を深める場となっている。

昨年度からは教育者向けの体験学習も行われ、アイヌ文化の基礎知識や歴史を学び、学校教育におけるアイヌ文化の活用が期待される。また、イオル再生事業の拠点として、しらおいイオル事務所「チキサニ」が開所され、多くの人々が集い、未来のために今、出来ることを模索している。

(しらおいイオル事務所チキサニ 学芸員 能登千織)

道東3管内
News

特別展 「釧路沖のクジラたち」

釧路市立博物館では9月19日より11月3日まで、特別展「釧路沖のクジラたち」を開催しました。これは、10月にクジラとその食文化を考える「全国鯨フォーラム2009釧路」が開催されるのに連携して、釧路周辺に生息するクジラ類や釧路の海を紹介するために企画したものです。特別展の開催にあたり、日本財団の助成を受けました。

特別展は1階マンモスホールと2階特別展示室で開催しました。1階はシャチなどの鯨類調査を行なっている笹森琴絵氏によるクジラやイルカの写真とその生態についてのパネル展示をしました。2階は釧路沖で行なわれている鯨類捕獲調査についてと秋に釧路沖に集まるシャチについてのパネル展示をしました。また、2005年に羅臼町で集団座礁したシャチの頭骨と脊椎骨やさまざまな種類のクジラヒゲ、釧路沖に海の豊かさを示す多くの海生生物の標本を展示しました。さらに体験型展示として、自作のクジラクイズとさまざまなクジラの音声を紹介するパソコン、クジラが音を聞くしくみである骨伝導（骨を媒介して音を伝える伝達方法）を体験できる装置を設置しました。この

体験装置は（財）日本鯨類研究所からお借りしたものです。子供のみならず、大人にもたいへん好評でした。また、音声展示やクジラクイズも多くの人に興味を持たれ、体験型の展示の有効性を改めて痛感しました。特別展にあわせた講演会として、（財）日本鯨類研究所の田村力博士による講演会と今回の共催団体でもある海の研究者集団「さかまた組」による講演会を開催しました。

釧路では市をあげて「くじらのまち」としての取り組みをしています。学校給食に鯨肉を出すなど、食文化の普及には以前から努めていますが、今回の展示はクジラも集まる豊かな自然としての海を伝える一端になったと思います。



シャチの頭骨・椎骨展
（釧路市立博物館 学芸員 松本文雄）

網走管内
News

平成21年度 網走管内博物館連絡協議会研修会

9月26日開催の網走管内博物館連絡協議会の研修テーマは「北方領土の自然と人びと」とした。これは北海道立北方民族博物館の第24回特別展「環北太平洋の文化IV 千島列島に生きる～アイヌと日露・交流の記憶」に関連した教育普及事業であったが、博物館関係職員にとっても現代的な有意義なテーマと考え、研修会としても位置づけた。当研修会では、東京農業大学講師兼NPO法人北の海の動物センター理事の小林万里氏と、同センター理事の本間浩昭氏を講師に迎え、北方領土周辺における豊かな生態系のメカニズムやその現状、人間の経済活動による環境改悪の進行状況、そして環境保全のための提案など、現地調査成果に基づいた解説を受けることができた。

小林氏は、北方領土海域と北海道オホーツク海域の豊かな生態系が、この地域一帯に広がる流氷によって育まれたと解説した。流氷は、冬にアムール川からオホーツク海への淡水の流入によって、海中に塩分や栄養素の濃淡による海水の層ができ、濃度の薄い海表面の水は氷となって流れ、海水下の塩分や栄養素は海流にもまれることでプ

ランクトンが発生させる。このプランクトンを求めて魚類が大群で来遊し、それを餌とする海鳥類や海獣類が集まってくる。また、サケやマスなどは川へ遡上することで、ヒグマやエゾシカ、植物などの陸上生物にも海の養分を仲介する役割を担っており、この地域は海陸ともに高い生物生産性と豊かな生物多様性を有するという。

本間氏は、小林氏によって紹介された当地の原始的で豊かな生態系が、人間の経済活動によって汚染されている状況を紹介した。海産物の乱獲や密漁、ロシアの経済成長に伴う土地の開発ラッシュが、資源の枯渇を引き起こし、動植物の生息環境を圧迫しているという。そして栄養素を海陸で循環させて豊かな生態系を維持してきたこの地域に、ひとたび人間の都合を優先させればあっけなくそのバランスは崩れ去ってしまうと警告する。本間氏は、世界自然遺産知床をウルップ島にまで拡大し、流氷が育むこれらの地域を日ロ共同の管理保全地域とすることを提案している。そしてこの連携を通じて、両国民の領土問題解決への意識を醸成することが可能とした。

北方領土を人間のみでなく、そこに生きる生物の共有財産とする両氏の講演によって、人間本意ではない視点で領土問題を考えることができた研修会であった。

（北海道立北方民族博物館 学芸員 角達之助）

動物園・水族館
News

動物園・水族館ニュース いま爬虫類館が面白い

動物園の大切な役割の一つに「種の保存事業」があります。絶滅が心配される種が、この地球上から消えてしまわないように飼育下で繁殖に取り組むものです。円山動物園でも色々な希少動物の繁殖に取り組んでいますが、今回は爬虫類館の「ヨウスコウワニ」について紹介します。

ヨウスコウワニは中国の長江下流域に生息している小型のワニで、近年は環境破壊や狩猟などにより、野生個体数が激減し生息数は約150頭と絶滅寸前であり、中国では国家プロジェクトとして飼育下繁殖に取り組んでいます。他国でも繁殖を目的とした飼育が行われていますが、中国以外での成功例はアメリカと日本(円山)だけです。

当園では、2001年、2008年、2009年と3回計20匹の繁殖に成功しています。ヨウスコウワニは寒冷地に生息しているため、「冬眠する」という習性を持っており、この「冬眠」が繁殖のための必須条件といわれていました。中国やアメリカにおいても屋外飼育を行うことで冬眠可能な環境を提供しています。当園のように屋内施設において、それも冬眠をさせないで繁殖に成功したのは世界で

初めてです。過去3回の成功により、繁殖技術はほぼ確立されたものと考えられます。希少動物を繁殖する究極の目標は、飼育下で繁殖した個体を野生復帰させることです。将来的に当園の繁殖技術がヨウスコウワニの野生復帰事業に貢献できれば素晴らしいことと考えています。世界的にも貴重な子ワニの姿をぜひご覧になっていただき、彼らからのメッセージを受け取っていただければと思います。

また、同じ爬虫類館内でインドネシア共和国の国宝、世界最大のオオトカゲ「コモドドラゴン」のペアも展示中です。国内で観覧できるのはここだけです。こちらも是非ご覧頂きたいと思います。



ヨウスコウワニの子どもたち
(円山動物園 飼育展示課長 上野 浩)

学芸職員部会
News

学芸職員部会 総会研修会開催される

学芸職員部会の平成21年度総会研修会が9月4日5日「デジタルデータ情報の利活用～資料の保存管理や公開活動のために」というテーマで、間宮林蔵～間宮海峡発見200年祭で賑やかな稚内市で開催された。

4日は稚内北星学園短期大学を会場に、高谷邦彦准教授(現:名古屋短期大学現代教養学科)を講師に、研修会を実施した。高谷准教授は、北海道博物館協会のホームページを立ち上げる際に、お世話になった方である。

「情報はみんなて共有するもの」という考えが主流になり、かつては「見た目」であったが、現在は1)新しい情報、2)ユーザビリティ(使いやすさ)、子どもからお年寄りまで使いやすく、途中で迷子にならないもの、3)検索性、必要な情報が見つけやすい、の3点が重要である。この3点を解決するのが「ブログ」である。ブログ中心のウェブページが主流となっている。道博協webについてもアドバイスを頂戴したので、今後の更新に役立つことが期待される。

その後、道博協web(ブログ)への投稿の仕



実践研修を受ける参加者

方を実際にPCを使って実習し、研修会を終了した。

総会では今後の研修会について協議され、「実技講習」を検討してはどうかなどの意見が出された。新役員として、部会長に武永真(白老元陣屋資料館)、副部会長に柳谷卓彦(北網圏北見文化センター)、佐藤卓司(小樽市総合博物館)三氏が選出され、来年度の総会研修会を釧路市で開催することが議決された。

5日は、稚内市北方記念館で開催の「間宮林蔵展」を見学、午後からはシンポジウムに参加し、江戸時代の蝦夷地と樺太について学んだ。

(えりも町郷土資料館・水産の館 文化財係長 中岡利泰)

青少年科学館
News

南極資料コーナーに初代「しらせ」の スクリュースレードが展示される

稚内市青少年科学館は、昭和49年7月に青少年の科学教育の振興を図ることを目的にノシャップ岬に稚内ノシャップ寒流水族館と隣接されて建設され、35年の歴史を刻んできました。プラネタリウム及び天文台を利用して天文知識を得ることもでき、南極展示コーナーも併設されています。

稚内市はブリザードや厳しい寒さなどの気候や地形が南極大陸に似ていることから、初期の南極観測隊（犬ぞり隊）の訓練地とし重要な役割を果たしてきました。また南極観測史上最も心温まる逸話として語り継がれている奇跡的に生還を遂げた「タロ・ジロ」の生まれ故郷であります。

さらに初代の砕氷船の名前が「宗谷」であったり、南極大陸に「宗谷海岸」という名前が存在すること等々歴史的にも深いかわりを持っています。これらの関わりから、当館には南極観測に関する学術的にも貴重な資料、第1次隊、10次隊、38次隊時の使用した居住棟や雪上車等貴重な物が280点展示されておりますが、昨年退役となった初代「しらせ」のスクリュースレード（4枚羽のうちの1枚）が、本年7月新たに加わりました。



初代「しらせ」のスクリュースレード
(重さ3.7トン、高さ約2m、幅1.7m)

当館には、歴代の観測船（砕氷艦）「宗谷」1/70「ふじ」1/50「しらせ」1/50の3代にわたる模型を展示しておりますが、それと比較するとその大きさに驚かされます。

今、世界中が地球温暖化対策に取り組んでいる中、当館も、南極観測の意義・目的を伝えながら、この館から地球環境問題に取り組む施設として、アピールしていきたいと考えているところです。

(稚内市教育委員会 科学振興課長 成澤正明)

道美学芸研
News

A★MUSE★LAND☆TOMORROW 2010 ARCHAIC FANTASY

土×炎=? ~古代を夢見るやきものアート~
2009. 12. 20(日)~2010. 2. 11(木・祝)

最近、縄文時代に熱い視線が注がれています。北海道初の国宝となった、函館市南茅部出土のいわゆる「中空土偶」、青森から北海道に広がる縄文文化圏をユネスコの世界文化遺産に登録する運動など、縄文ブームともいえるほど各地で展覧会やイベントが催されています。地球温暖化など自然環境への負荷が議論され、エコな生活や環境保護への関心が高まっている現在、縄文文化に見られる自然と人間との共生関係が注目されています。

では美術の分野では、縄文文化はどのように見られてきたのでしょうか。様々な造形的



高村宜志《時空シリーズ9501》1995年 作家蔵

な実験が繰り広げられた20世紀前半、ヨーロッパでは原始美術の持つ素朴で力強い造形が多く、芸術家たちを魅了しました。日本でも第二次大戦後、縄文時代の土器や土偶、古墳時代の埴輪などに見られる原初的な造形美に触発され、斬新でユニークな造形を陶芸で生み出した芸術家たちが現れます。

本展は、やきものアートの原型ともいえる土器や土偶、そしてその土俗的でプリミティブな造形がかきたてる古代への憧れ。こうした古代造形の世界と、それに触発された近現代の作家たちの陶芸作品、合わせて約90点を紹介するものです。土と炎が生み出す不思議な造形、古代人たちをも魅了したその造形世界をお楽しみください。



鈴木治《馬》1982年 東京国立近代美術館

(北海道立近代美術館 学芸第二課長 佐藤幸宏)

館園の主な展覧会と 普及事業

(2009年11月～2010年3月)

石狩

- 江別市郷土資料館(011-385-6466)
12/19～2/28 企画展 冬期ロビー展
札幌芸術の森美術館(011-591-0090)
11/29～1/31 札幌美術展 真冬の花畑
2/7～4/4 札幌芸術の森美術館 開館20周年記念 芸森の名品
札幌市青少年科学館(011-892-5001)
1/5～1/17 冬の特別展「(仮称) ロボット展2010」
北海道開拓記念館(011-898-0456)
11/28～2/28 第154回テーマ展「クラーク博士の教え子 内田滯」
いしかり砂丘の丘資料館(0133-62-3711)
12/～3/ 資料館のお宝2010
野外博物館 北海道開拓の村(011-898-2692)
11/21～12/23 第6回絵手紙むらの風景展
1/22～2/21 企画展「北海道文化の源流を辿って③」
北海道立文学館(011-511-7655)
11/21～1/17 企画展「サハリンを読む一遙か[樺太]の記憶」
1/30～3/22 企画展「藤倉英幸と旅のイメージ」
北海道近代美術館(011-644-6881)
12/20～2/11 A★MUSE★LAND★TOMORROW 2010
ARCHAIC FANTASY土×炎=?
～古代を夢見るやきものアート～
北海道立三岸好太郎美術館(011-644-8901)
10/31～1/17 特別展示「北海道美術史エピソードー道展創設のころ」
1/22～3/28 第4期所蔵品展「わたしの三岸好太郎2009」

後志

- 小樽市総合博物館(本館・運河館, 0134-33-2523)
10/1～11/30 運河館小さな企画展「職人の道具箱」
(財)北一ヴェネツィア美術館(0134-33-1717)
11/2～1/31 「ゴッホ・ガラスモザイク絵画展」第四回
11/9～2/28 「ヴェネツィア・魅惑のカーニバル展」・「ムラノガラス復刻全作品展」
3/1～5/23 「千年の伝統の上に咲くーガラスの花展」・「ガラスに宿る愛ー美しき女性像展」
小川原脩記念美術館(0136-21-4141)
11/12～4/18 小川原 脩 自伝風な展覧会ー私の中の原風景
11/12～12/20 国松登展 ー北の詩情
12/23～2/21 小川原脩・後藤庸也・谷口一芳三人展 ー遠い記憶・街の思い出
2/24～3/28 2010 くっちゃんART展 II
西村計雄記念美術館(0135-71-2525)
11/12～3/14 画業をだどる展覧会「はがらかな詩」
11/12～3/14 開館10周年記念「たんけん! ハッケン! びじゅつかんー地域の子どもたちと西村系雄記念美術館の10年」
3/20～4/11 第6回つたえる・つたわる箱絵展
木田金次郎美術館(0135-63-2221)
11/3 開館記念日にお贈りするアニバーサリーコンサート・無料開放 文化の日ワークショップ
11/11～4/4 《開館15周年記念》コレクション

再発見 秋から冬を迎える常設展「花と果実の木田金次郎」

- 12/19～1/17 「木田金次郎の本棚」
2/6～21 「第15回ふるさとこども美術展」
3/9～14 「第10回仲間たち展」
3/20～4/4 「きだび写真館」
フゴッベ洞窟(0135-22-6170)
旧下ヨイチ運上家(0135-23-5915)
旧余市福原漁場(0135-22-5600)
余市水産博物館(0135-22-6187)
～12/13 2009年度文化財施設公開

渡島

- 北海道立函館美術館(0138-56-6311)
10/11～11/29 函館開港150年記念 開港地をうたう
12/5～1/17 高橋留美子展 It's a Rumic World
1/23～3/22 文字とアートの素敵なお関係あなたにそっと伝えたい。
七飯町歴史館(0138-66-2181)
11/13～12/13 特別展「道南発掘物語」
3/6～25 パネル展「タイトルのないはっぴょうかい6」

胆振

- 苫小牧市博物館(0144-35-2550)
11/14 芸術探訪 ジョルジュ・ルオー
2/6～3/21 企画展「春をまつ生き物たち」
のぼりべつクマ牧場(0143-84-2225)
通年 クマの腕だめし
登別市郷土資料館(0143-88-1339)
2/2～3/3 お雛様人形展

日高

- 沙流川歴史館(01457-2-4085)
10/6～11/29 特別展「遺跡からみたコタンのくらし」
平取町立二風谷アイヌ文化博物館(01457-2-2892)
10/15～12/15 特別展「沙流川流域の文化的景観」
新ひだか町静内郷土館(0146-42-0394)
9/29～1/25 企画展「受け継がれるアイヌ民具」

空知

- 滝川市美術自然史館(0125-23-0502)
11/12～17 滝川市児童生徒作品展
11/28～1/24 コレクション展「か・た・ち」
1/29～2/7 滝川美術協会展
2/11～2/21 國學院大學北海道短期大学部「はる展」
3/10～3/14 北空知高等学校書道展

上川

- 旭川市科学館(0166-31-3186)
11/14～12/13 ミニ企画展「外来生物展」
11/12～2/21 科学館クラブ(後期)
11/12～2/21 親と子の実験室(後期)
中原悌二郎記念 旭川市彫刻美術館(0166-52-0033)
11/14～1/21 線は語るー彫刻家の素描と版画
10/1/30～3/28 収蔵品展ー副題未定
北海道立旭川美術館(0166-25-2577)
10/24～1/14 私の愛は、蝶のように飛び去った…アロイズズ/北海道のアウトサイダー・アート
1/23～3/14 高橋留美子展ーIt's a Rumic World
1/23～3/14 「高橋留美子展」展関連事業 ギャラリーツアー
3/20～5/30 オムニバス・道北の美術 森と川と原野からー、第2展示室 板津邦夫の木・黙ワールド

名寄市北国博物館(01654-3-2575)
12/17～1/21 名寄のスキー作り

網走

- 北網走北見文化センター(0157-23-6700)
11/11～12/20 オホーツク物語 I 鷺見憲治展
1/8～2/6 N.P.blood 21 vol.5 菅定展
1/8～2/6 N.P.blood 21 vol.6 熊澤桂子展
2/28～3/22 美術博物館蔵品展
3/25～28 北海道二科写真展
網走市立郷土博物館(0152-43-3090)
3/1～31 特別展「モヨロ貝塚発掘成果展」
北海道立北方民族博物館(0152-45-3888)
10/31～12/13 企画展「カムチャツカ先住民調査の10年」
11/10～29 ロビー展 縄文土偶国宝指定記念「北海道土偶名品選」
2/6～4/11 企画展「カナダの民話をみるー極北のイヌイト・アートを中心に」
紋別市立博物館(0158-23-4236)
2/6～28 写真展「紋別ーオホーツク風物語」
3/13～28 「博物館サークル活動作品展」
美幌博物館(0152-72-2160)
11/1～29 企画展「交通安全ポスター・作文展」(予定)
12/13～1/24 企画展「寄贈美術資料展」
2/7～3/7 企画展「冬季作品展」
3/28～6/13 企画展「ざりがに展(仮称)」

十勝

- 帯広百年記念館(0155-24-5352)
1/9～2/3 ロビー展『生活史年表展 5』
1/15～31 第28回郷土美術展
2/6～3/3 ロビー展『ひな人形展』
2/17～23 後期陶芸講座修了作品展
北海道立帯広美術館(0155-22-6963)
11/20～3/31 コレクションギャラリー 美術のみ・か・た 油絵と日本画
11/20～1/13 はな展 四季の花・幻想の華
1/22～3/31 ポップ・アート 1960's→2000's
11/1～7 芸術週間

釧路

- 釧路市立博物館(0154-41-5809)
11/7～12/13 企画展「炭鉱(ヤマ)のくらし・マチの記憶」
12/19～2/14 企画展「レコードジャケット展4」
2/6・7 博物館氷まつり分館
2/20～3/28 交流企画展「北と南を結ぶヤマ(炭鉱)」
北海道立釧路芸術館(0154-23-2381)
11/21～1/20 視覚の「わな」『トリックアートの世界』
11/21～12/20 水越 武「大地の想い」
1/30～3/14 コレクション・ギャラリーー釧路芸術館ベスト50
釧路市子ども遊学館(0154-32-0122)
11/21～23 化学実験カーがやってくるin釧路
1/4～1/24 巡回パネル展「日時計の楽しみ」
標茶町郷土館(015-487-2332)
11/2～12/20 ミニ企画展「二ツ山第3地点遺跡出土遺物展」
1/～3/ 町内移動展(歴史系)「標茶線廃線20周年記念標茶線の始発駅標茶」

根室

- 根室市歴史と自然の資料館(0153-25-3661)
11/3 歴史と自然の資料館講演会
2/27 学芸員講演会